

経済産業省

第2回 デジタルスキル標準検討会
議事要旨

1. 日時・場所

日時：令和4年1月31日（月）13:00～15:00

場所：オンライン会議（Teams）

2. 出席委員

石戸座長、折茂委員、草野委員、孝忠委員、河野委員、高橋佐知子委員、高橋範光委員、竹川委員

3. オブザーバー

（一社）超教育協会、（一社）データサイエンティスト協会、
（一社）日本経済団体連合会、（一社）日本ディープラーニング協会
文部科学省、厚生労働省、経済産業省、（独）情報処理推進機構

4. 議事概要

(1) 第1回検討会の振り返り

事務局より資料2に沿って説明を行った

(2) デジタルスキル標準（リテラシー）に関する討議

デジタルスキル標準（リテラシー）のねらい、デジタルスキル標準（リテラシー）の枠組み、デジタルスキル標準（リテラシー）の各パート、残論点の洗い出しについて討議を行った。要点は以下のとおり。

【デジタルスキル標準（リテラシー）のねらい】

- デジタルスキル標準（リテラシー）のねらいの文言に関する議論
 - 高校教育（情報Ⅰ）や大学教育（数理・データサイエンス・AI モデルカリキュラム）で学ぶ内容と産業界のリテラシーレベルの乖離を防ぎ、産業界にも学校で学ぶ内容を活かす場があることを伝える必要がある。
 - ビジネスパーソン全体がビジネス、日本を変えていくことが趣旨であるため、「デジタル社会の一員として参画する」、「デジタル活用を自ら実践する」といった表現にして欲しい。教育機関でデータサイエンスやデジタルについて学んだ人が、社会で実践的に活躍できる場があることが伝えられると良い。
- デジタルスキル標準（リテラシー）のねらいの表現方法に関する議論

- デジタルスキル標準によって生み出される変化を Before/After で比較して示すのであれば、DX への抵抗勢力だけでなく、中間的な人のペルソナを設定することで、差別的な印象を与えないようにするべきである。
- 関心や知識がない人のペルソナに女性のイラストを使うのは、ステレオタイプを生んでしまうことも考えられるので避けるべきではないか。

【デジタルスキル標準（リテラシー）の枠組み】

- 大項目は 3 つから 4 つ程度としてシンプルに整理し、詳細の説明を後段に加えるという 2 部構成が分かりやすいと考えられる。
- デジタルリテラシー協議会が提供しているデジタルリテラシー・スキルフレームワーク（Why・What・How で整理したもの）を用いて、既存の区分を Why=DX を推進する意義、What=DX/AI に関する知識、データドリブンな意思決定、How=実装において必要な知識として置き換え、マインド、思考法を加えることで整理することが出来ると考えられる。
- 整理の仕方については、世の中にある既存のフレームワークも参考にできると考えられる。
- 「考える」の大項目に関しては、マインドに繋げるための How とみなし、独立した項目とする必要がないという意見と意思決定における考え方として独立した項目として残した方がよいという意見に分かれる。

【デジタルスキル標準（リテラシー）の各パート】

- 知る
 - 各中項目の抽象度を上げ、AI 活用の前段階として、IT・データ基盤が必要であるが、基盤構築が遅れている日本の現状に対する危機感を抱かせるような内容を付け加える。
 - DX の中で AI が重要技術であるという前提を加える。
 - データやデジタル技術の活用によって新たな価値を生み出す、という内容だけでなく、より初歩的な業務効率化できるといったデジタイゼーションも含めることが考えられる。
 - 経営、システム戦略、マーケティングなどのビジネススキルは入れる必要はない。
- 使う
 - 知るだけでなく、学びを体得するためにも、実際に手を動かすスキルを求めることは重要である。
 - テクノロジー：最低限知るべき技術をリスト化して中項目を構成し、新しいテクノロジーも含めることができるタイトルとする。
 - プログラミング：プログラミング的思考があればよいという意見と一定レベルのプログラミング経験を持ち、プログラミングの難しさを理解する必要があるという意見に分かれる。

- データ：Excel の使い方を勉強するだけでなく、データを活用した判断ができるレベルまで求められていることが伝わる書き方にする必要がある。
- 気を付ける
 - リスクを過剰に回避しない、気をつけすぎて期を逃さないといったニュアンスを追加する。
 - 他の項目に入るかもしれないが、DX 推進における実装の難しさを入れる。
- 考える
 - 論理思考：デジタルスキル標準として求めるにはレベルが低すぎるため、中項目に含める必要はない。
 - プロジェクト型の働き方：専門性の異なる人々と協力して業務を推進すること、新たな知識にアップデートするためのアンラーニングが重要であることを伝える。
 - デザイン思考：現状の「考える」の内容や顧客価値にも含まれてはいるが、独立した項目として入れるか検討する。
 - アジャイル：アジャイル開発の話と誤解されない伝え方をする。
- マインド
 - 新たな価値の発見の下のレベルとして、自身の業務における問題発見力、問題認知力が必要である。

【残論点の洗い出し】

- デジタルスキル標準の内容をどのレベルまでできることを求めるのか（知っているか、できる、考えられる必要があるのか）を議論する必要がある。

以上

<お問い合わせ先>

商務情報政策局 情報技術利用促進課（IT イノベーション課）

電話：03-3501-2646